月田古墳群B1

―昭和55年・56年度発掘調査の概要―

粕川村教育委員会
1982

序

粕川村は，昭和54年度より，全村にわたって圃場整備事業が実施されております。それによって，村の姿も，自然環境を始めとしてさまざまに変りつつあります。その中にあって，先人の残していった貴重な，文化財もその例にもれません。

粕川村教育委員会では，この変わりゆく村の姿を8mmフィルムに記録するとともに，埋蔵文化財などの調査を実施し，その保存につとめております。

今回，調査が行なわれた，月田古墳群は，第2次大戦後まもない，昭和23年に，故尾崎喜左雄先生を中心とする群馬大学考古学研究室によって発掘調査が実施され，現在，県指定史跡となっている「鏡手塚」「壇塚」古墳の2古墳を含む，35基程の古墳からなる県内でも著名な古墳群でもあります。この古墳群はでき得るかぎり保存していきたいと考えますが，今回，やむを得ず，7基の古墳について発掘調査を実施し，ここにその概要を示すしだいです。

学史的に著名な遺跡の報告としては，あまりにもはずかしいしだいですが，後刻本報告にその大部分をゆずるとして今回は，この概報で御容赦願うしだいであります。

最後に，今回の調査にあたり，御理解をいただいた地元地権者の方々，土地改良区の方々，及び調査に従事した作業員の方々に感謝申し上げ序文といたします。

粕川村教育委員会
教育長　金　井　久　雄

目　　次

I　発掘調査の概要　1
II　発掘されたおもな古墳　5
　1　粕川村12号墳　6
　2　粕川村26号墳　12
III　昭和55年，56年度
　月田古墳群第1次調査のまとめ　16

挿図目次

第1図　昭和56年度調査遺跡位置図　1
第2図　上毛古墳総覧による古墳の位置　2
第3図　発掘された古墳　(1)　3
第4図　発掘された古墳　(2)　4
第5図　粕川村12号墳墳丘図　7
第6図　粕川村12号墳石室平面図　8
第7図　粕川村12号墳石室床面図　9
第8図　粕川村12号墳石室出土の鉄製刀子　10
第9図　粕川村12号墳前庭部出土の須恵器　11
第10図　粕川村26号墳墳丘図　13
第11図　粕川村26号墳石室出土の遺物　13
第12図　粕川村26号墳石室平面図　14
第13図　粕川村26号墳石室床面図　15

図版目次

図版1　空からの月田古墳群　5
図版2　粕川村12号墳全景　6
図版3　粕川村26号墳全景　12
PL1　粕川村12号墳の発掘　17
PL2　〃　18
PL3　粕川村26号墳の発掘　19
PL4　〃　20

例　　言

1．本書は，昭和58年度に圃場整備事業が着工予定である，粕川地区（第2工区）の県営圃場整備事業と係る埋蔵文化財の先行調査として粕川村教育委員会が実施した月田（ツキダ）古墳群の第1次調査の概要を示したものである。

2．本書掲載の古墳は群馬県勢多郡粕川村大字室沢（ムロサワ）字茂呂木（モロギ）688に所在した粕川村12号墳及び大字月田字富士ノ宮167～171に所在した粕川村26号墳の発掘調査の概要を示したものである。

3．月田古墳群の調査は，粕川村教育委員会が主体となり，昭和55年度，昭和56年度国庫補助金及び昭和55年度，昭和56年度県農政部委託金の一部を使用し，昭和56年2月16日～同年3月31日までと昭和56年4月15日～同年7月24日の期間，7基の古墳について調査を実施した。

4．本書の執筆，編集は，調査担当でもある小島が行った。なを，出土遺物等については粕川村教育委員会の責任のもとに保管，管理されている。

I　発掘調査の概要

粕川村は昭和54年度から県宮圃場整備事業がほぼ全村にわたって実施されている。これに伴い埋蔵文化財の発掘調査を粕川村教育委員会が主体となり，昭和54年度より実施している。昭和56年度はその3年目である。

昭和56年度の調査遺跡は，今回報告の昭和55年度からの継続事業である月田古墳群，昭和56年度工事着工区域である，11工区内の新屋遺跡群，それに1年の先行調査としての6工区内，膳地区遺跡群の3遺跡である。

本報告は，この中で月田古墳群の概要と示したものである。

月田古墳群は，粕川村大字室沢字茂呂木から同村大字月田字富士ノ宮，長峰の3つの字にまたがって広がる，総数，約40基から形成される古墳群である。

この月田古墳群の所在する月田地区は，県道，桐生，大間々，前橋線から北へ約1km，南流する粕川の左岸にあたり，粕川村全体の形をフラスコにたとえるなら，ちょうど，その肩から首にかけての部分にあたる。東は，新里村，西は宮城村と境を接し，北

第1図　昭和56年度調査遺跡位置図

は大字室沢，南は大字中，膳と接している。

村には近戸神社が鎮座し，毎年，9月には，「月田のささら」として著名な，お川下りの神事をもった獅子舞が行なわれている。又，かつて，群馬大学の尾崎喜左雄氏は，月田古墳群や，月田に残る小字「御門（ミカド）」の地名に注目し，この地を，勢多の郡衙の候補地と考えられていたようである。

月田古墳群は，この月田地区の北部，標高230 mから標高260 mの洪積台地上に位置している。

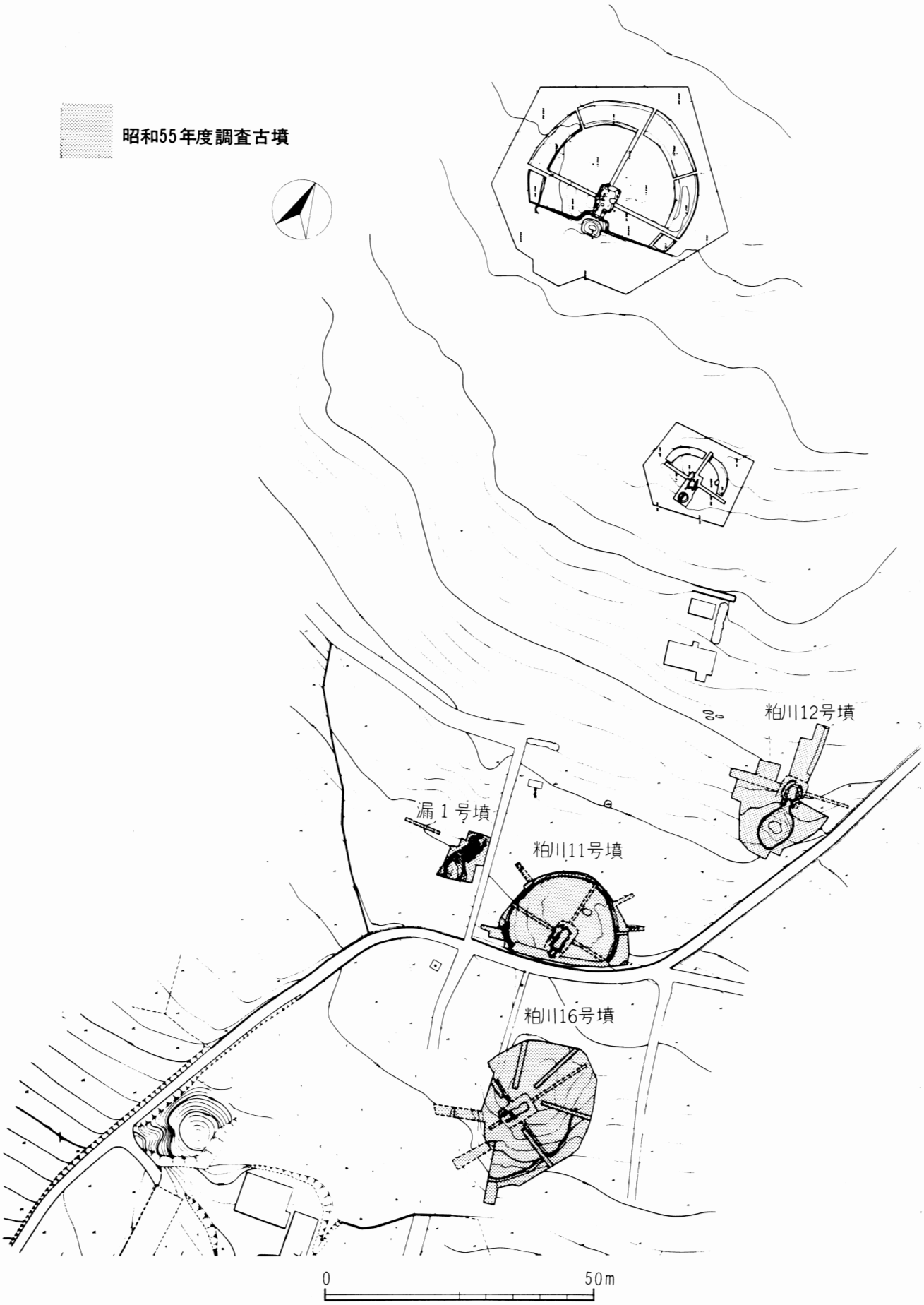
今回の調査は，道水路部分，あるいは，畑の段差の解消などにより，現状保存が不可能なものであり，しかも，現状で古墳としてまったく認定できないものであるが，昭和10年調査の上毛古墳総覧には古墳として記載されているもの7基について記録保存を目的として調査を実施した。

調査は，ボーリング調査による石室部分の確認から開始し，その後，トレンチによって墳丘等の調査を行った。調査は，圃場整備着工の2年先行という形で実施したため，調査範囲は非常に限定されてしまった。しかし，そのような中で粕川村11号墳，16号墳，それに今回報告の26号墳などはかなり全掘に近い調査を実施することができたのは幸運であった。

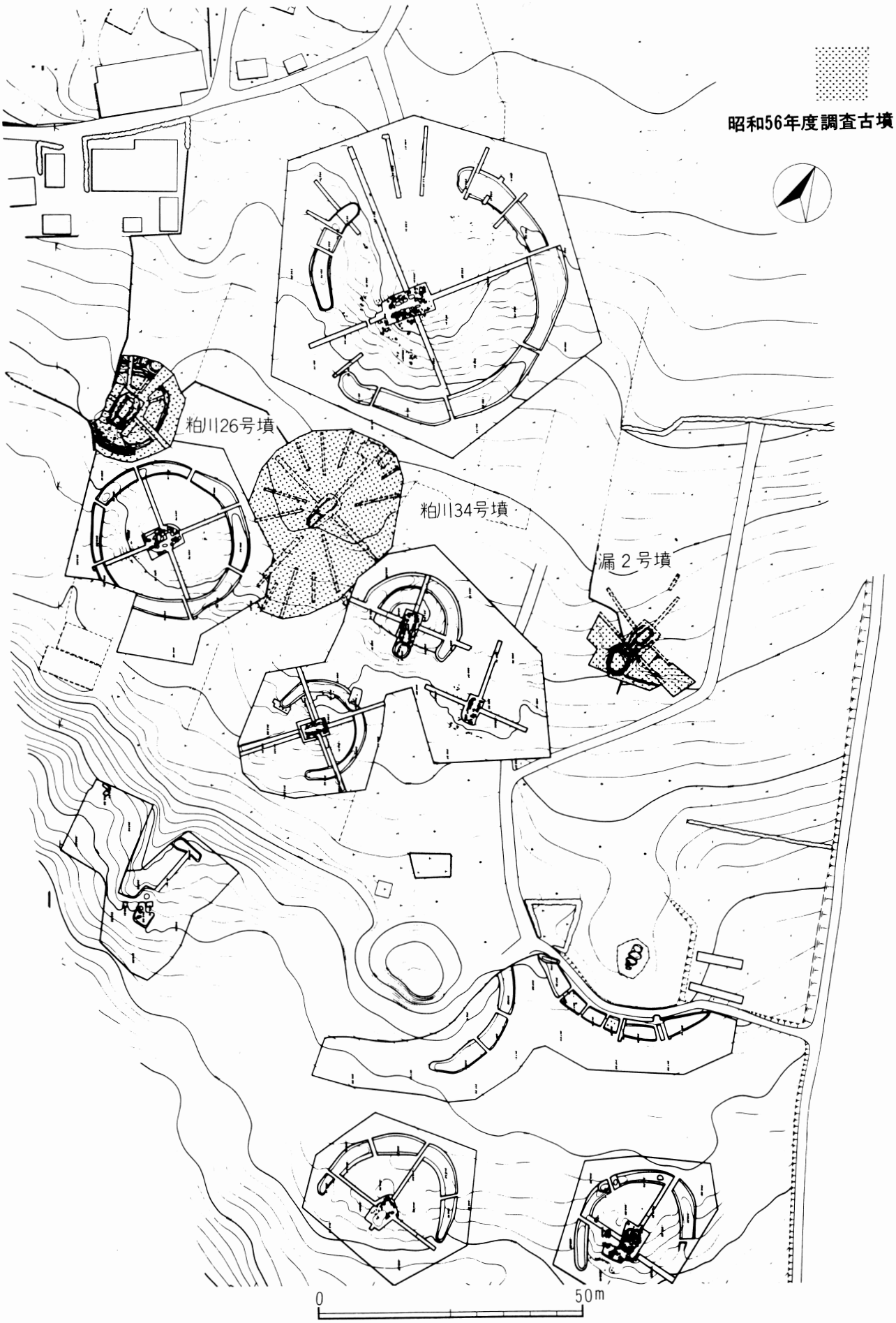
昭和55年度は，上毛古墳総覧記載，粕川村11号墳，12号墳，16号墳，記載漏1号墳の4基の調査を行い，昭和56年度は，粕川村26号墳，34号墳，記載漏2号墳の調査を実施した。

上毛古墳総覧
掲載地番

第2図　上毛古墳総覧による古墳の位置



第3図　発掘された古墳(1)



第４図　発掘された古墳(2)

II　発掘されたおもな古墳

1　粕川村 12 号墳

月田古墳群中，もっとも北に位置する一群の古墳である。所在地は，粕川村大字室沢字茂呂木 686 番地であった。

現況は桑園であり，墳丘らしい起伏はまったく見あたらなかった。ただ，既当地，南端は，石垣が積まれることにより，2段に耕作されていた。その石垣は石室の開口部を一部利用して築かれたものであった。

内部主体

主体部は，安山岩の転石を用いた，自然石乱石積による両袖型横穴式石室であり，開口方向はS－3°－Wである。石室は旧表土及び地山のローム層を掘り込み根石を裾える所謂，山よせ式のものである。石室部は玄室と羨道とに分けられる。

玄室は大きな石を横積みにして根石とし，その上にはやや小ぶりの石を同じく横積みにしている。平面形はやや胴張りの石室である。玄室の長さは 2.54 m，幅 1.5 m を計る。

玄門部框石は横長の石を縦位置に裾えることにより一石で構成されている。

奥壁も同様に一石で構成されている。又床面は挙

図版 1　空からの月田古墳群

大の円礫が敷石状に敷きつめられていた。

羨道は長さ2m，幅0.9mを計る。発掘当初は閉塞石がつまった状態であった。閉塞は，開口部及び玄室と羨道の境に円礫を小口積にし，その間を大小の礫で充填するというものであった。

開口部には，玄門と同様に一石構成による羨門が付設されていたような痕が調査では確認できた。

石室内からは，鉄製の刀子が確認されているが，いずれも原位置とは考えられず，破砕礫や転落石の間からの出土であった。

石室は地山を掘り込み根石を置き，側壁を積むが側壁と掘り方の間には，川砂利及び大小の礫による裏込めが大量につめられていた。

外部施設

石室を中心として南北及び東西にトレンチを設定して周掘の検出にあたったが，それらしいものは確認されなかった。たぶん，本古墳は当初より周掘をもたないものではなかったか。

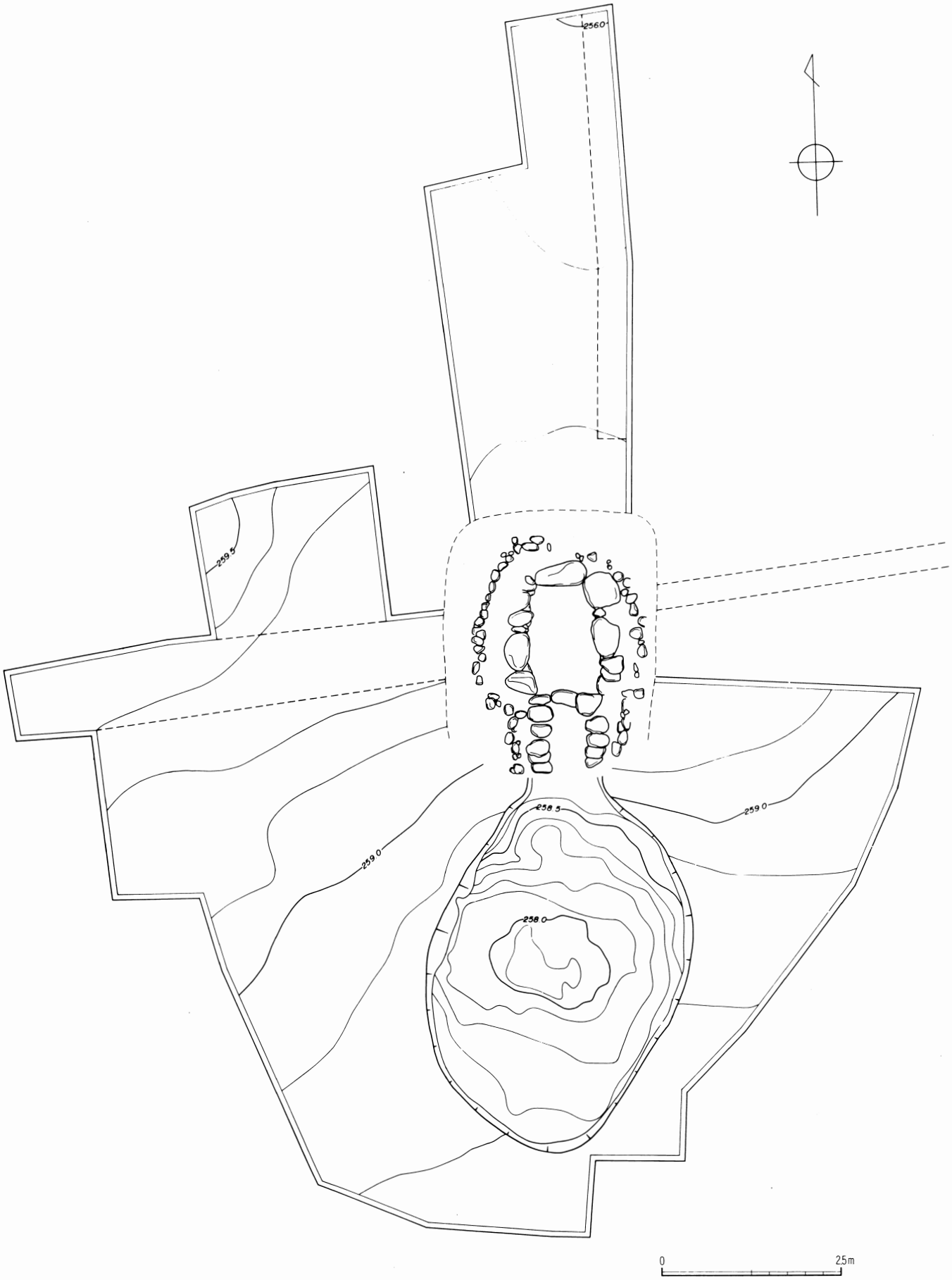
南側のトレンチでは浅間B軽石が広く堆積していたため，そこを拡張したところ，石室開口部からしずく状に広がる落込みを確認した。この落込みの上層にはB軽石が堆積し，下層には，FP粒やC軽石粒を含んだ，旧表土に近い黒色土の堆積がみとめられた。この黒色土上面には，円礫が，石室開口部から流れ込むような状態で，びっしりと充填されたような状態で確認できた。又，この黒色土中からは第9図に示した須恵器が出土している。これと同様な遺構が記載漏1号墳，同2号墳からも検出できた。ここでは，この遺構を前庭状遺構としてとらえておく。

出土遺物

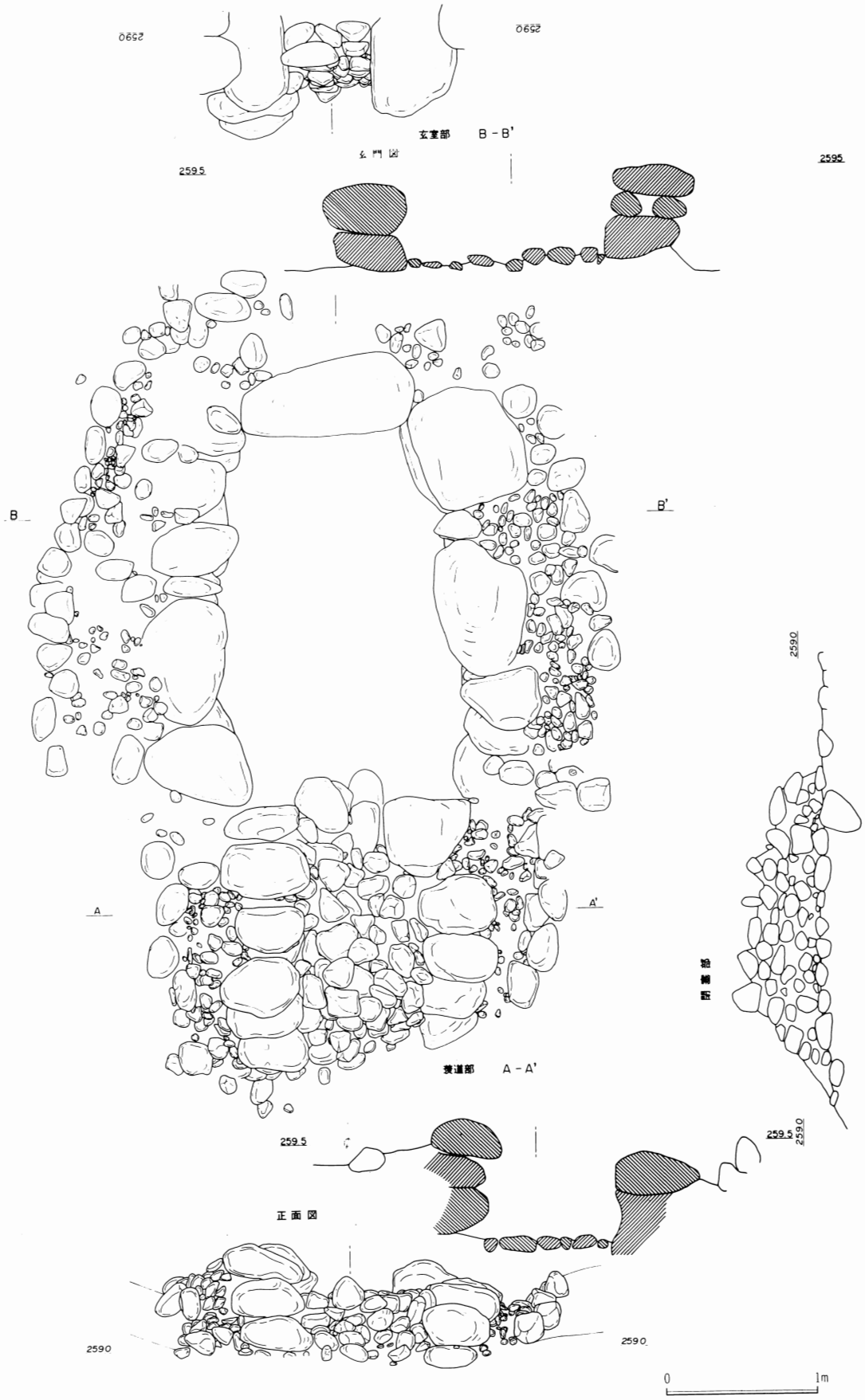
本古墳石室からは4本の鉄製刀子が出土した。

第2図1は，鉄製刀子である。全長9.4㎝，他の刀子に比べて著しく小形である。刃部は柄の部分より短い。柄部には木質部が遺存し，柄基部には留金具が遺存している。刃部には大きな錆が付着してい

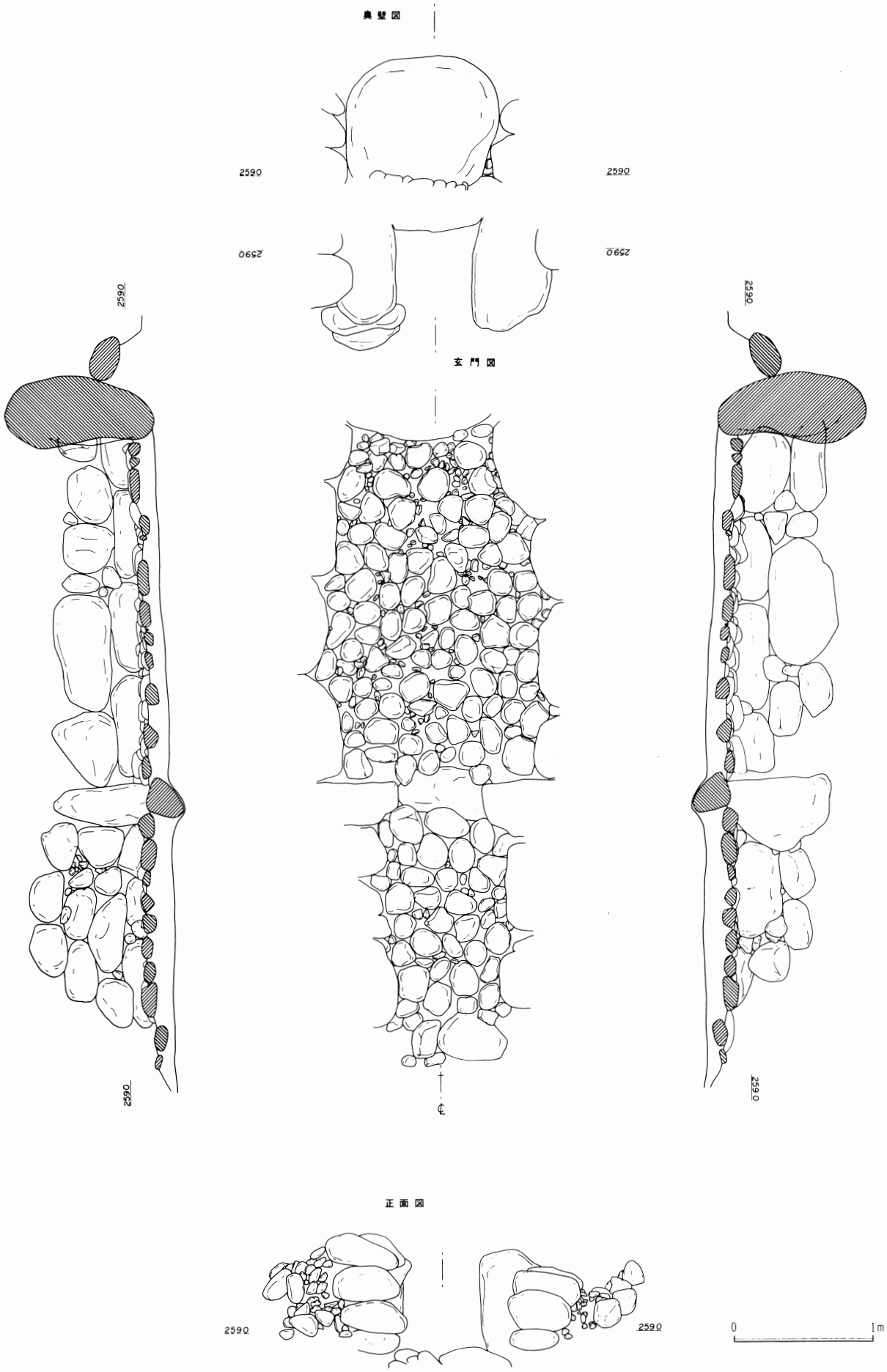
図版2　粕川村12号墳全景



第5図　粕川村12号墳墳丘図



第6図　粕川村12号墳石室平面図



第7図　粕川村12号墳石室床面図

る。

第8図2は，刃部先端を欠損しているが，現存長12.5㎝を計る。刃部は多少屈曲している。柄には木質部が残存し，柄基部には留金具が遺存している。

第8図3は，両匡を有するものであり，刃部は長く，柄部には木質が遺存している。柄部中央には基部から先端に向ってゆるやかなふくらみを有する。

錆化が著しく，2つに折れて出土している。茎先端と刃部先端を欠損している。現存長14.9㎝。

第8図4は，上記の3点に比らべ最長であり，又遺存状態ももっとも良好である。柄部には木質が被り，基部には留金具の欠損したものが遺存している。

第9図に示したものは前庭状遺構埋土下層より出土したものであり，充塡された礫よりも明らかに下層から出土している。

1は杯身である。底部周縁には回転のヘラナデ調整がみとめられる。現存率⅓　色調　灰色。

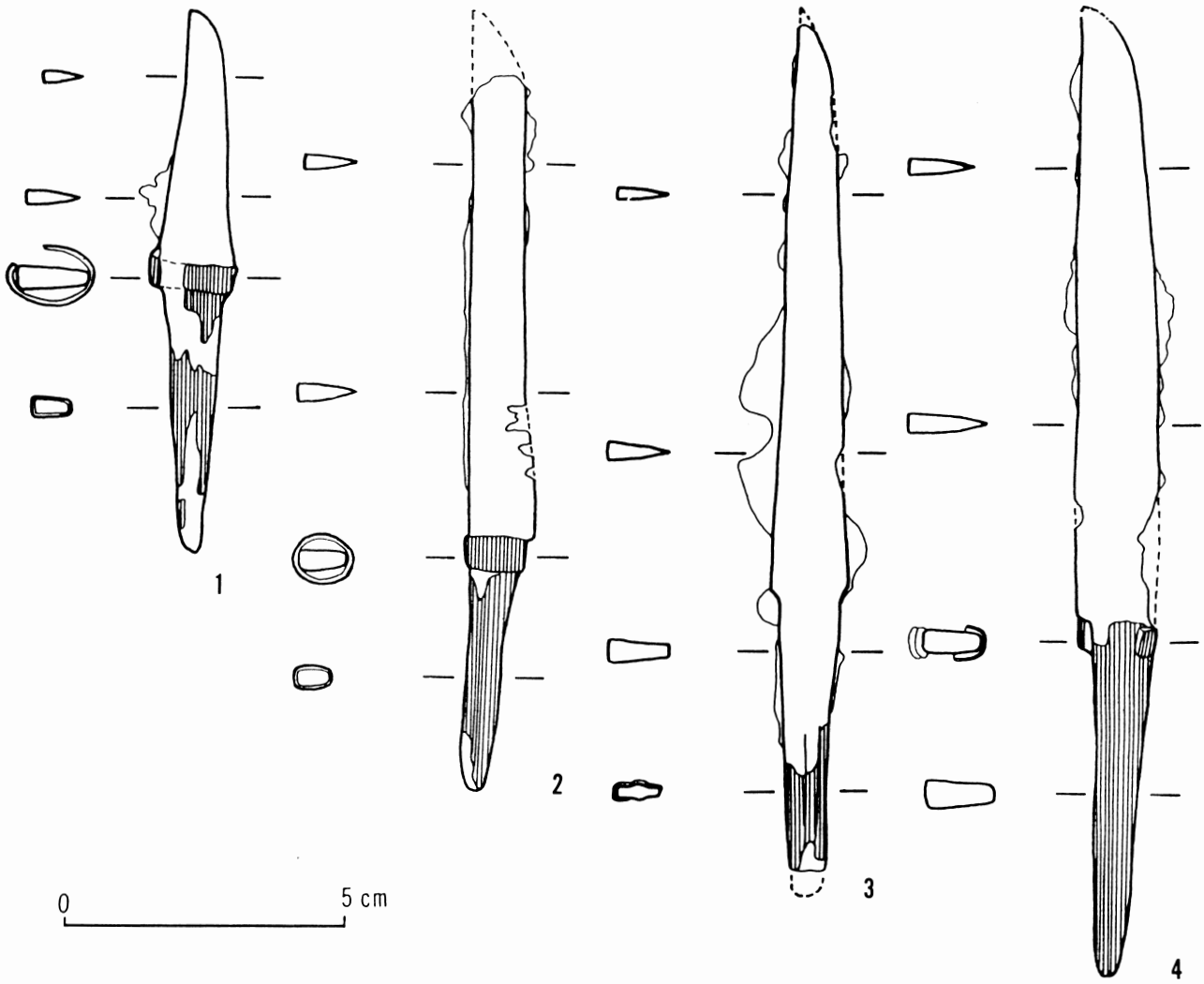
2は杯身。1と同様，底部周縁には回転ヘラナデ調整がみとめられる。口縁部はややゆるやかに内湾ぎみに立ち上がる。口唇部は1に比らべ丸みが強く厚い。現存率½　色調　暗緑灰色

3　杯身，非常によく焼締められている。底部は未調整であるが，底部縁辺にヘラケズリがみとめられる。ほぼ完形，一部にゆがみがある。色調　暗赤茶褐色。

4　杯身　非常に器形のひずみが大きい。底部の調整は荒く回転糸切りののち，ヘラナデによる底部周縁の調整がみとめられる。ほぼ完形，色調は暗灰色

5　高台付の杯である。やや小ぶりのものである。口縁部は内湾ぎみに立上がる。高台は高く，端部はやや外反する。現存率¾　色調　灰色。

6　高台付の杯，口縁部は底部から直線的に立ち上がる。高台部は高く，端部に段をもつ。接地面



第8図　石室出土の鉄製刀子

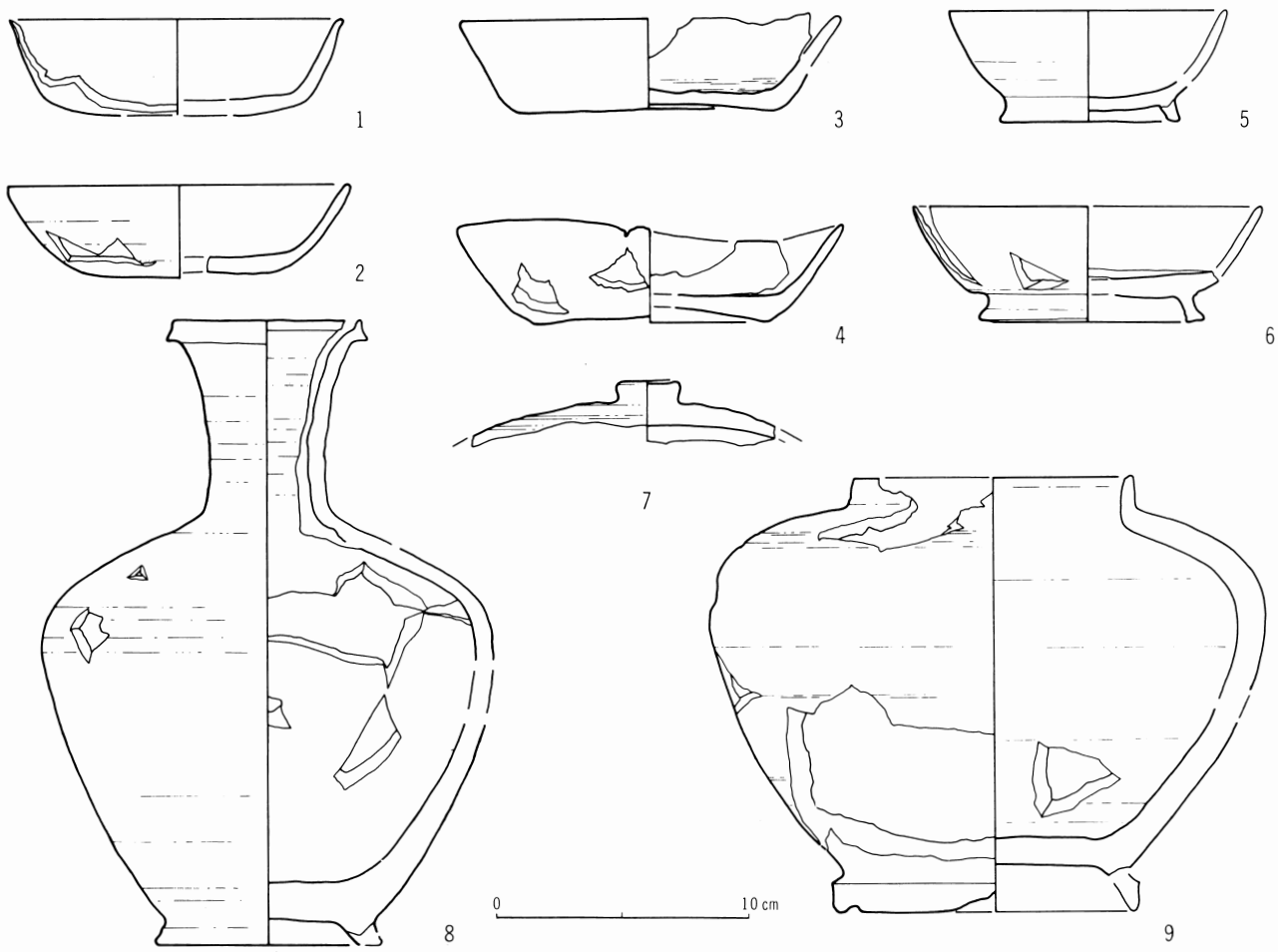
は内端部である。又，5に比らべ高台を底部中央よりに偏って貼付されている。現存率½　色調　暗灰色。

7　蓋　口縁部を欠損している。全体に偏平であるが，中央のつまみは高く，しっかりしている。又つまみ中央はへこみをもっている。現存率⅔　色調灰色。

8　長頸壺　頸部は比較的太い。口縁部は外反した口縁をもう一度，上方につまみ上げたような形をもち，端部は鋭角にしあげられている。胴部，肩にはわずかに張りをもち，直線的に底部に至る。底部には比較的高い断面方形の高台を有する。ほぼ完形　色調　暗灰色。

9　短頸壺有蓋のものと考えられる。口頸部は短く，直立し，口縁端部はやや丸みを帯びる。胴部は，やや肩の張る器形で底部に至る。底部には高く段を有する高台を貼付している。高台は八の字形に開き端部は鋭く仕上げられている。ほぼ完形　色調淡灰色。

以上のような出土遺物　及び石室の形態から本古墳は7世紀後半のものと考えられる。



第9図　前庭部出土の須恵器

2　粕川村26号墳

月田古墳群の中央部やや西よりに位置していた古墳であり，昭和8年に土取りの為，勾玉や管玉さらには鉄鏃が出土したとされる粕川村25号墳に隣接している。地元の古老の話しによると，この25号墳の石室には入口がなかったという。現在，この25号墳の周囲には、埴輪片を有する古墳が数基存在しており，埴輪を有する古墳の少ない月田古墳群の中では比較的古い時期の一群の古墳が存在しているように思われる。以上のようなことを総合すると，25号墳は，その出土遺物，石室の形態などから月田古墳群中，もっとも古い時期のものと予想される。しかし残念ながら，この古墳は，土取のため消滅してしまい，今はその痕跡すらもみとめることができない。

粕川村26号墳は，粕川村大字月田字富士ノ宮167番地から171番地にかけて所在していた。石室の大部分は167番地に位置していた。

現状は桑畑であったが，ちょうど石室の上が石捨て場となり，小山状になっていた。又，南から見るとわずかな起状をみとめることができた。又西側は2m近い段ができており，石垣がつまれていた。

内部主体。

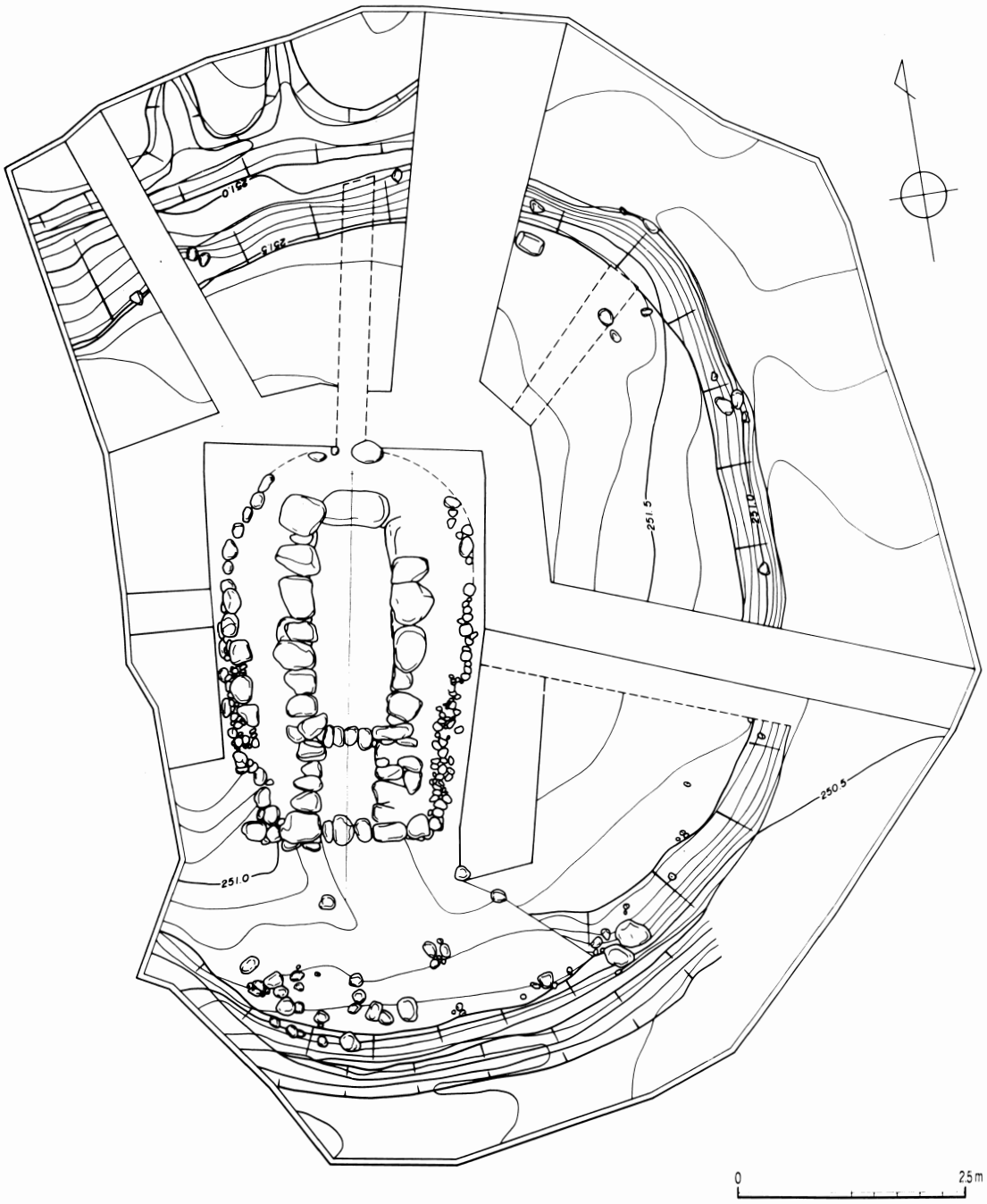
主体部は，安山岩の転石を用いた，自然石乱石積による両袖型横穴式石室である。開口方向はS—11°—Wである。

石室は旧表土及びローム層を一部掘り込み根石をおく。石室は玄門により，玄室部と羨道に分けられる。

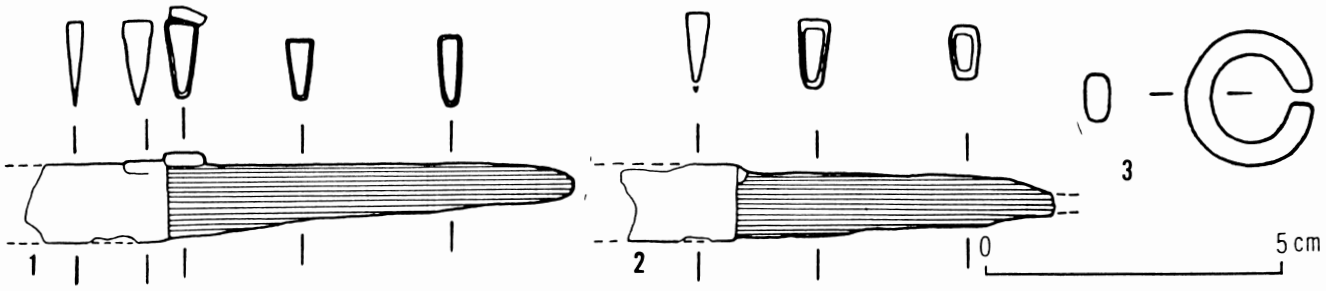
玄室　奥壁は一石で構成されている。側壁は奥から開口方向に向かって徐々に小さな石を用いて構成されている。玄門は，小形の円礫を4石小口積みにして構成されている。この造りは，前述の12号墳とは対照的である。榧石も小形の石を縦位置に並べただけのものであり，床面よりかなり上に出ている。

床面の石も敷きつめられた状態ではなく，円礫をばらまいたような状態であった。

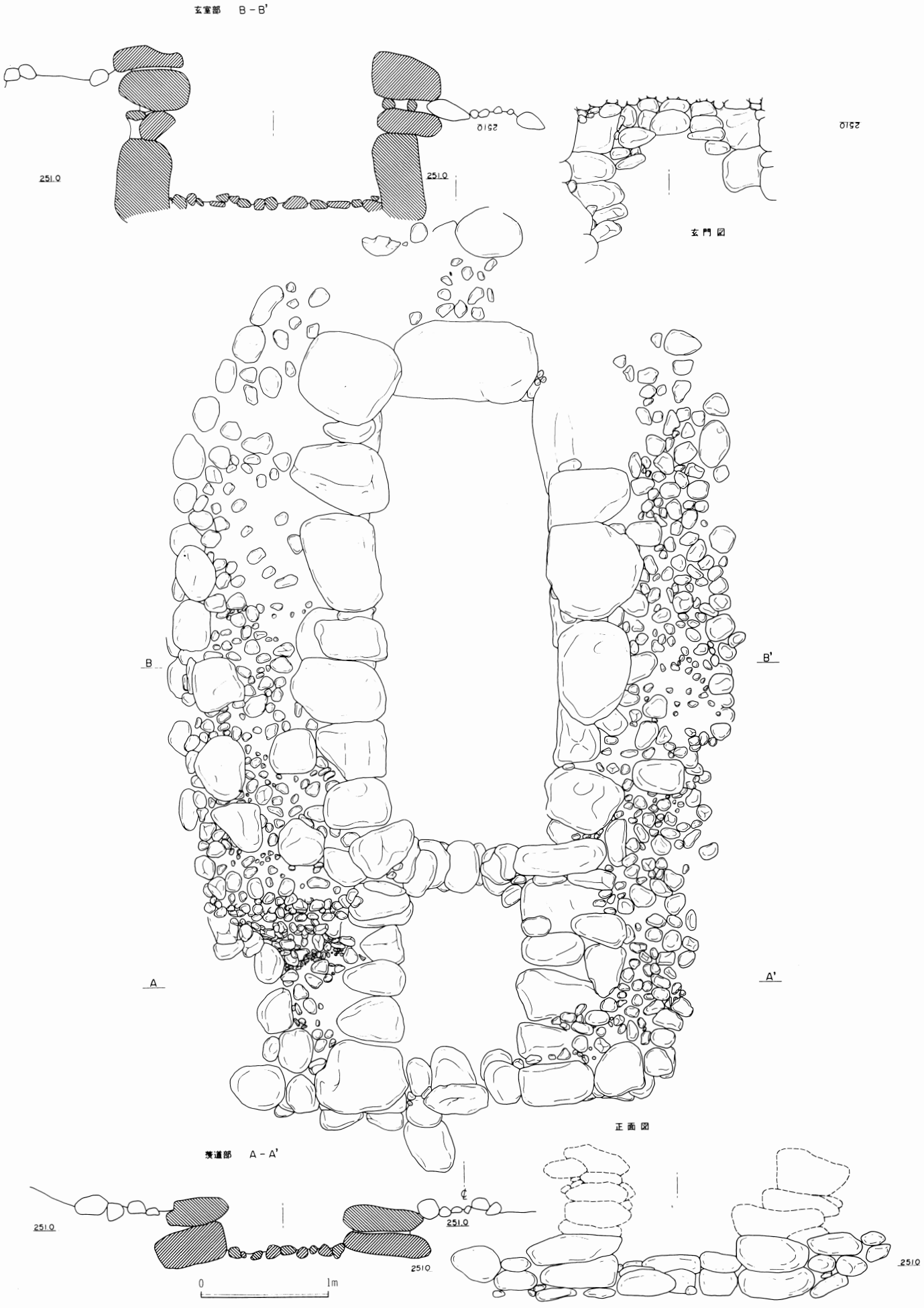
図版3　粕川村26号墳全景



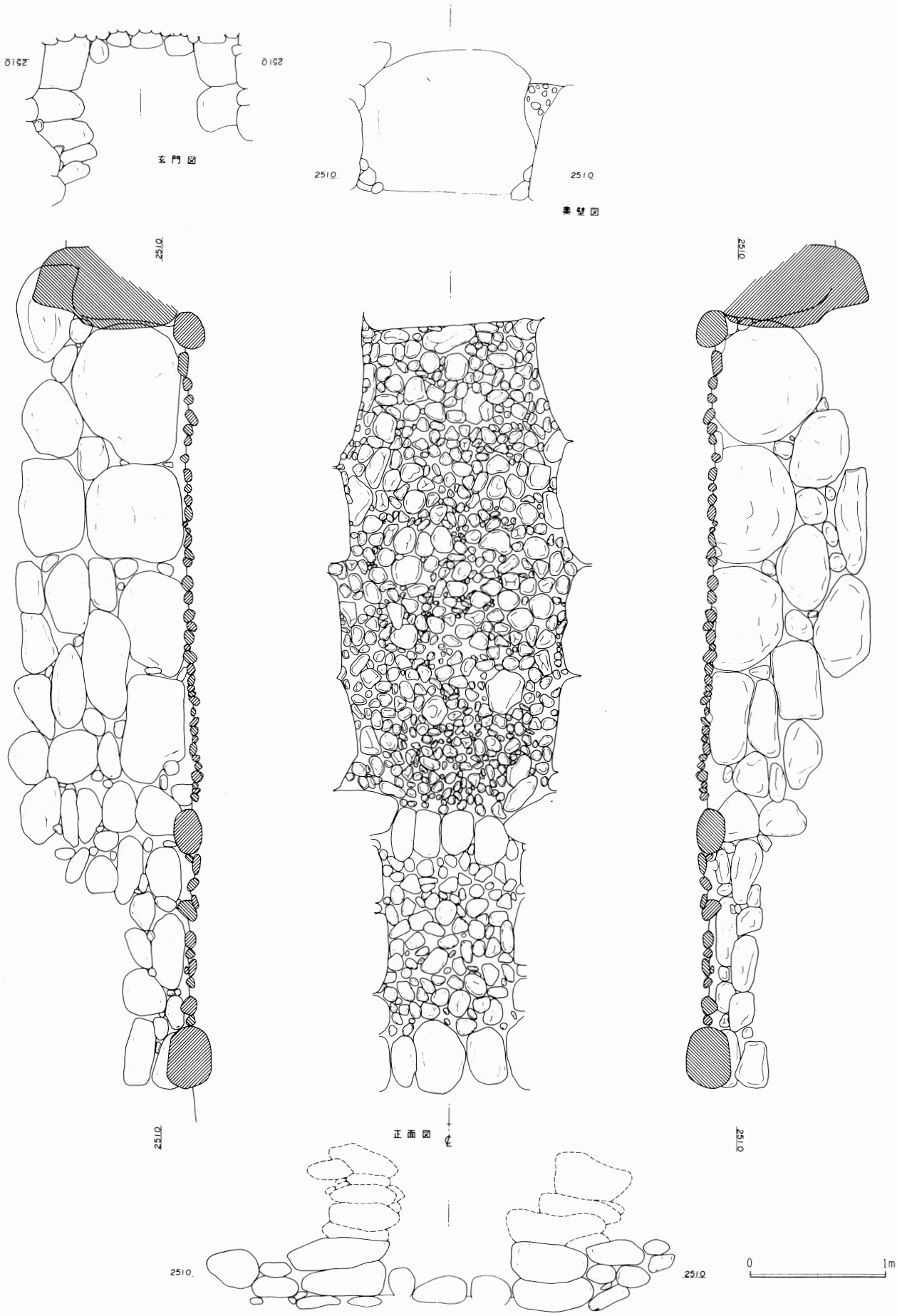
第 10 図　粕川村 26 号墳墳丘図



第 11 図　石室出土の遺物



第 12 図　粕川村 26 号墳石室平面図



第 13 図　粕川村 26 号墳石室床面図

玄室の長さ 3.50 m　幅 1.56 mを計る。

羨道部は，開口部に向かってやや狭まくなるようにつくられている。玄室の長さ 2.10 m，幅 0.905 mを計る。羨道部の一部は側壁が除去されており，閉塞石もほとんど除去されていた。

開口部にも玄門と同様の構成をもった羨門が存在したものと考えられるが，その根石部分を確認し得たのみであった。

石室は掘り方と壁石の間には多量の裏込めの石がつめられていた。

外部施設

石室を中心にしてトレンチを設定し旧表土を追うことにつとめた。その結果，直径 14 mの円形の墳丘を検出することができた。ただ周掘外側の立ち上がりは検出できなかった。

石室開口部前には大小円礫の集積がみとめられたが，12 号墳のように掘り込みは存在しない。ただわずかに石室開口部分は他と比べ低くなっている。

出土遺物

石室内より第 11 図に示した鉄製刀子 2 本と耳環 1 個が出土した。

1 は鉄製刀子，刀子柄及び刃部の基部である。柄部には木質が残存している。刃部基部には本体とは別造りの輪状の止め金具が一部残存している。

2 も鉄製刀子，刃部の基部及び柄の部分である。柄には木質部が残存している。

3 は耳環である。断面は隋円形を呈する。緑青が一面に付着している。

この 26 号墳については時期を推定できる資料はないが，埴輪を有しないことなどから 12 号墳と同様に 7 世紀後半代をあてるのが妥当と考える。

III　昭和 55 年，56 年度，月田古墳群第 1 次調査のまとめ

月田古墳群は，昭和 23 年，群馬県において，以後数百基の古墳調査にたずさわり，古墳研究史上一時期と築いた群馬大学史学研究室，尾崎喜左雄氏による，鏡手塚古墳の調査によって，この月田古墳群の発掘の歴史が初まる。以後，30 年までに 6 基の古墳が調査されている。この調査の成果の一部からは氏の重要な論考の一つとなる，榛名二っ岳給源軽石降下時期の問題などが生まれているなど群馬の古墳研究史上重要な遺跡である。

今回の調査は，地元の人達の理解により，圃場整備着工の 2 年前の事前調査ということであり，十分な調査とはいいがたい。しかし，今回の調査によって，① 上毛古墳総覧に記載漏の古墳がかなりの数存在している可能性が高い。② 古墳の中には周掘など外部施設を有しないものがある。③ 古墳の遺構中には浅間Ｂ軽石が純層で確認できる。④ 本古墳群の主体は，6 世紀末よりもむしろ，埴輪消滅後 7 世紀後半代の古墳が主体である。⑤ 開墾により古墳の天井石等は除去されているものがほとんどであるが，石室自体の残りは比較的良好である。という以上 5 点のことを把握することができた。これらは，これから 2 年後におとずれる圃場整備工事に対応するための方針をさだめる点において非常に重要な事実を我々に与えてくれた。

1 発掘前の月田古墳群

月田地区北部の一群の発掘前の状況。南より。

2 粕川村12号墳の発掘

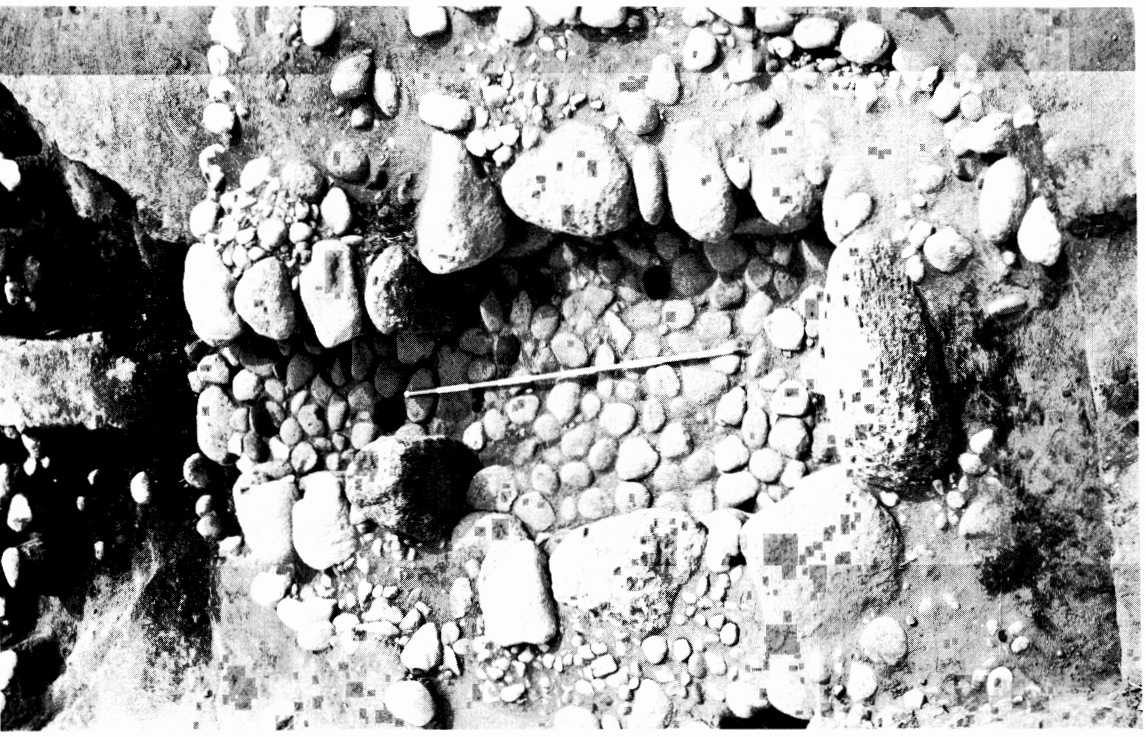
石室確認の後，トレン調査による。外部施設の確認状況。

3 粕川村12号墳前庭状遺構

30 cm大の円礫が充塡されている。礫の下からは須恵器が出土している。

4 前庭部の土層堆積状況

充塡された円礫の上面を浅間B軽石がおおっている。



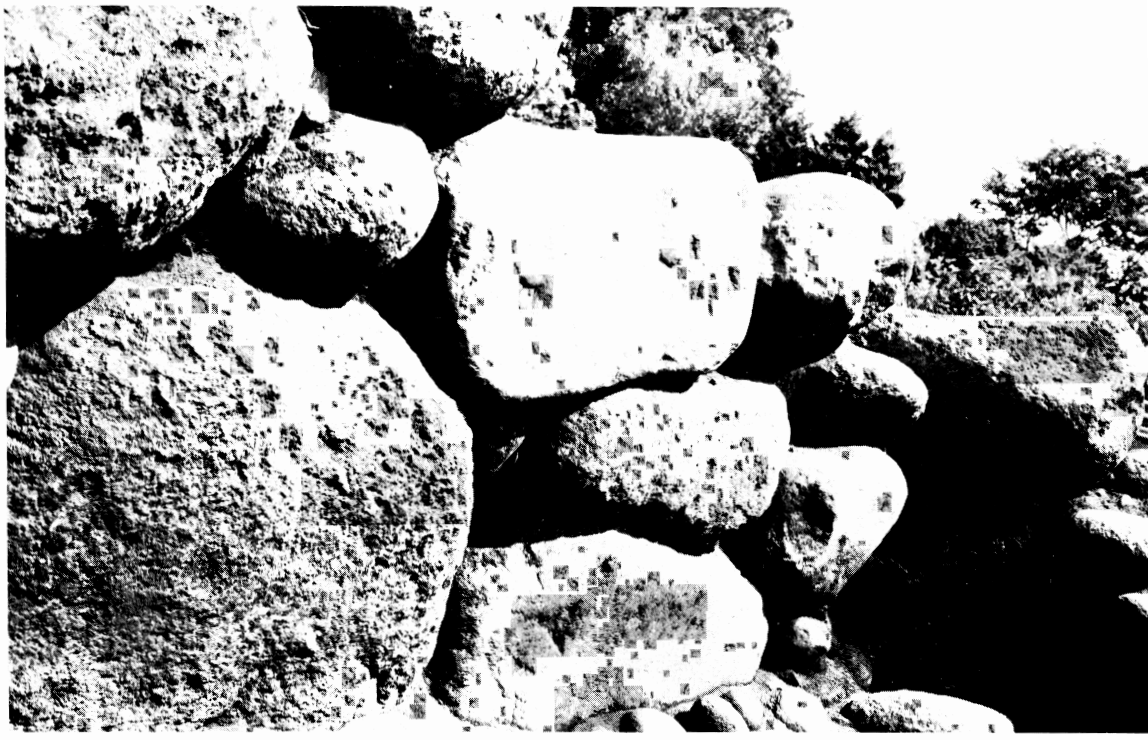
5 石室部の完掘状況

6 羨道部西側壁の状況

玄室部と比らべ小さな石を小口積にしている。

1 粕川村26号墳石室部

玄室より玄門の状態と閉塞の状況。羨道部の閉塞はほとんど除去されていたが，閉塞は円礫よりも，むしろ川砂利を多く用いていたようである。奥壁より。

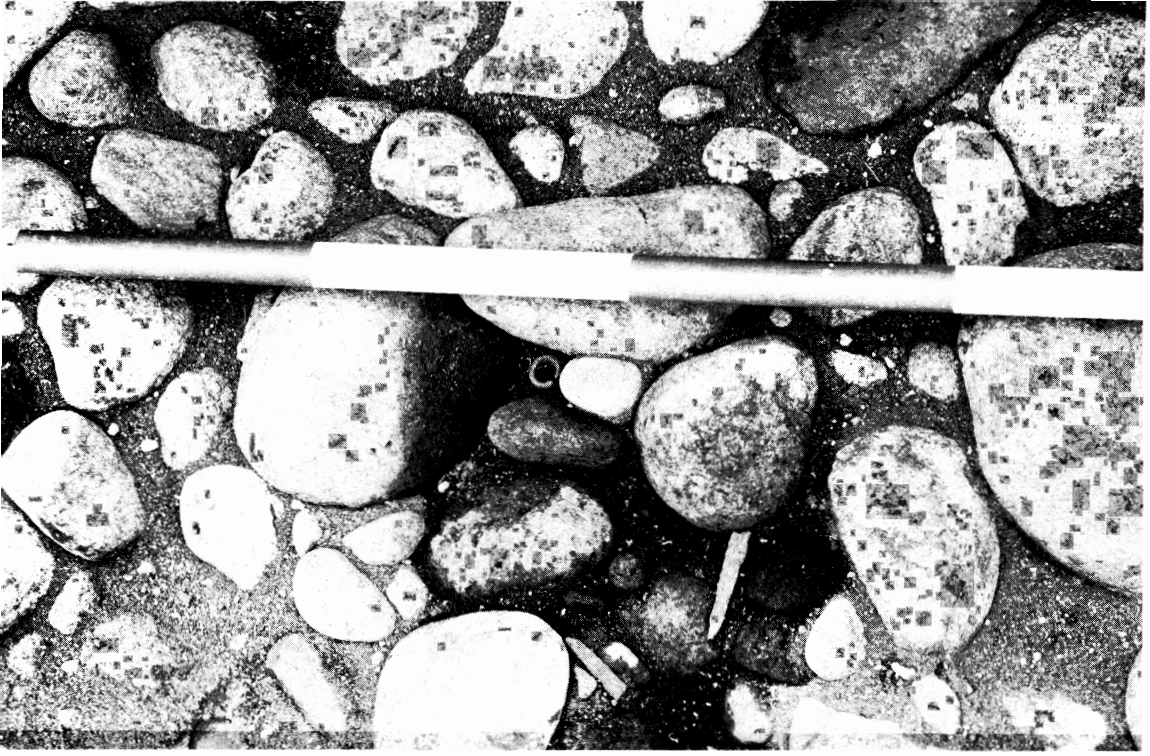


2 羨道部東壁の状態

側壁に使用される礫はほとんど自然石であるが，一部には稜を削り落とした痕跡がみとめられるものもある。

3 石室開口部の状態

羨道部の一部は除去されて，一段低くなっている　側壁は石を小口積みにしているのがわかる



4 石室内の遺物出土状態

耳環及び刀子の出土がみられた。遺物は玄室の羨道より，やや中央から出土した。

5 石室の完掘状況

南から。

6 月田古墳群の第 1 次調査にたずさわった人達

月田古墳群B_1
粕川村文化財報告第3集

発 行 日　昭和57年3月
編集発行　粕川村教育委員会
　　群馬県勢多郡粕川村西田面194
印 刷 者　㈲小林印刷所